

Groin pain in collegiate American football, lacrosse, soccer players

1K06A085-5 久保田了弘

主査 金岡恒治先生

副査 鹿倉二郎先生

【緒言】私は本学在学中にアメリカンフットボール部に所属し2年生までプレイヤーとして活動していた。その際、部活の練習後に鼠頸部周辺に痛み（グローインペイン）を感じるがあった、またチームメイトの中でもグローインペインを感じている選手もありそれが本研究を始めるきっかけとなった。本研究ではグローインペインの発生が多いといわれる、アメリカンフットボール部、ラクロス部、サッカー部における発生率、痛みの程度などのアンケートを行った。

【方法】本研究の対象は、本学在学のアメリカンフットボール部、ラクロス部、サッカー部の男子選手、年齢18歳~23歳（平均年齢20.8歳±1.1歳）の110名を対象とした。各クラブの内訳はアメリカンフットボール部34名、ラクロス部21名、サッカー部55名であった。調査手法は自己申告アンケートによって行った。まず基本情報として、性別、年齢、大学に入ってから競技歴、ポジションを調査項目とした。続いてグローインペインの項目として、グローインペインの有無、現在の痛みの有無、期間、回数、程度、発生機転またその際の痛みの程度の順に調査した。

【結果】アンケートの集計結果で、報告されたグローインペインの発生件数は27件で全体の24.5%であった。また各クラブにおけるグローインペインの発生件数は、ラクロス部7件、サッカー部12件、アメリカンフットボール部は8件であった。発生率に関してはラクロス部33.3%、次いでアメリカンフットボール部24.5%、サッカー部21.8%でラクロス部が最も発生率高かった。発生機転に関して発生率が高かったのは、ダッシュ、全力ジャンプ、サイドステップ、クロスステップの4項目でそれぞれ24件となった。この4つの種目を痛みの程度で動きに支障をきたすという点で見るとダッシュが最も割合の高い62.9%であった。次いで、サイドステップ、クロスステップが共に52.9%最後に全力ジャンプが40.7%という結果に

なった。各クラブによるグローインペインの発生率は以下のグラフである。

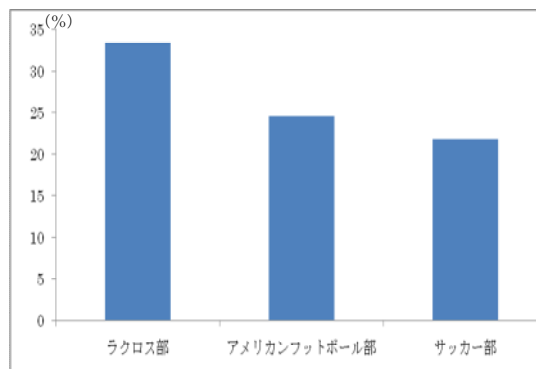


図1,各クラブにおける発生率の違い

また動作によって動きに支障が生じる割合のグラフは以下の通りである。

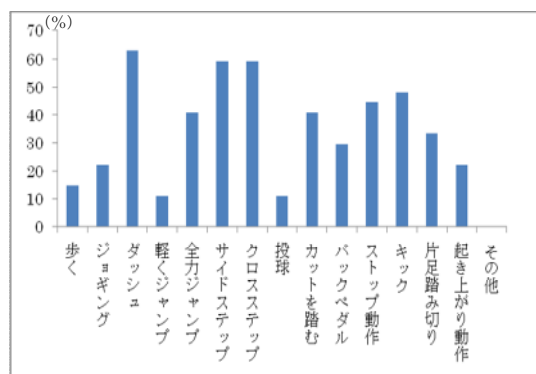


図2,各項目での動きに支障が生じる割合

【考察】本研究で報告されたグローインペインの発生率においてラクロス部が高いというのは、ほかの2つのクラブに比べ、横の動きや切り返し動作も多いうえにクロスを使って投球動作も行っているためではないかと考えられた。発生機転に関して、ダッシュは全てのクラブにおいて基本となる動きでサイドステップ、クロスステップも各クラブにおいて多く要求される動きなので発生率が高いのは予想できたが、全力ジャンプがグローインペインの発生率として高いのは意外であった。しかし動きに支障をきたす面からみると、全力ジャンプは最も割合が低く、これは動作をする際に他のダッシュ、サイドステップ、クロスステップに比べ鼠頸部周辺にかかる負荷が大きいからではないかと考えられる。